学生と同等なレベルに到達できないと決めてしまいがちである。無論、異なった社会・文化に生まれ育ったわけなので、言語のハンディや有する知識の相違は否めない。しかし、留学生はあえて外国での過酷な学習環境を自らの意志で選択するのであって、さまざまなハンディを乗り越えていく覚悟はできているはずである。ハンディの多い外国での厳しい環境は必ずしも否定的な側面のみを有するわけではなく、その厳しさゆえに自国で学ぶ場合と比較して短期間で数倍も自分の能力を伸ばすことができる。つまり、大事なのは日本人学生と異なる基準を設け、留学生を能力のない者として扱うことではなく、その無限の潜在能力を引き出してあげることである。もし日本の大学が留学生に対してますます「甘い」基準を採用していけば、質のいい学生は留学先として日本を選ばなくなるはずであり、単に留学生の数を増やしただけの結果に終わってしまうことが懸念される。

自慢の留学生たちとともに（前列左から３人目が筆者）

厳しい評価基準

私自身は留学生だった頃、留学生だからといって決して甘えたくない、むしろ日本人学生よりも厳しい基準で評価されたいと考えていた。仕事に就いた今でも同様な考え方を持ち続けている。質・量の両面において、もし日本人の教官と同等の仕事しかできないのであれば、私がここにいる意味がないと自分に言い聞かせているのである。

学生を指導している私の中に間違いなく、自分の留学生生活を支えてくれた恩師やその頃お世話になった方々の面影が存在している。恩師からは学問的知識のみならず、外界の客観的捉え方やその位置づけ方などを学んだ。その厳しい指導には「留学生だから」といった甘えはなかったと私は信じている。お世話になったその他の方々には、人に対する思いやりや誠実さ、心の温かさを学んだ。偶然にも、人生観を変えてしまうほど私の人生に影響を与えてくれた人は全員日本人である。私が愛して止まない「日本」はそのような方が描いてくれた「日本」であり、現在の私はその「日本」を留学生に紹介しようと必死になりながら、恩師やお世話になった方の真似事をしているに過ぎないのである。

人間関係にも学問にも国境がないことを、この一七年間の日本での生活を通して痛感するようになった。留学生一〇万人の計画もようやく達成され、留学生教育の質的向上を真剣に目指すべき日本は留学生に対する特別な基準や特別な扱いを改めるべきではないだろうか。真の国際社会・異文化共生社会の実現のために、そして真の意味での「豊かさ」をもたらすために国籍と無関係に一人一人が常に高い志を持つべきではないだろうか。

なお、一九九二年四月から九三年三月までの一年間、国際文化教育交流財団から奨学金をいただき、経済的心配もなく勉学に専念することができた。深く感謝している次第である。

国境を超えた学問を目指して

スリランカ出身。一九九七年九月東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了(学術博士)。一九九八年五月～現職。専門は日本語学、日本語教育学。

ルチラ・パリハワダナ
Ruchira PALIHAWADANA
金沢大学留学生センター助教授

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三〇カ国の大学・大学院へ一五四名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三五カ国四二九名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

留学生に対する日本語・日本文化研修プログラムを担当

夢と希望と好奇心に満ち溢れながら、憧れの国日本に一留学生としてやって来てから早一七年である。学部、マスター、ドクターと長く続いた東京での留学生生活にもようやくピリオドを打ち、金沢大学での現職を得てから五年半も経つ。振り返ってみれば、あっという間に過ぎていった年月であり、特に、学生の指導に当たるようになってからは、学生の数だけ複数の人生を同時に歩んでいるようで、時間の経過を目まぐるしく感じるのである。

現在私は、金沢大学留学生センターで世界中から日本語、および日本文化を学びに来る留学生に対して教育を行う日本語・日本文化研修プログラムを担当している。日本語・日本文化研修生の教育全般を担当しながら、他の留学生に対する日本語教育にも携わっている。つまり、外国人でありながら留学生に日本を紹介する教育プログラムを手掛け、ネイティブスピーカーでないのに日本語を教えているわけである。

無論、満々たる自信で上記の仕事をこなしているのではなく、学生にとって果たして自分でいいのか、日本人の先生と違った何かを自分が実行しているのか、絶えず自問自答しながらの自分との闘いである。

留学生の気持ち

留学生教育に際して間違いなく元留学生としての自分の経験が役に立っている。第一に、留学生の気持ちを理解することができるので、身近な存在として彼らに接することができる。留学生はよく取り立てて用事もないのに研究室にやって来ては長々と世間話をすることもあるが、そのような場合、切り出しにくい相談があるケースが多い。その相談も必ずしも、「どうしたらいいのか」タイプの解決策を求めるものではなく、自分の気持ちを一人で整理できず、信頼できる先生のような存在に気持ちの整理を手伝ってもらいながら、それでいいのか確かめたいことが多い。学生から、悩みのみならずその解決策も誘導しながら、学生の不器用さを昔の自分に照らし合わせ、思わず微笑んでしまう。

「留学生扱い」すべきでない

第二に、留学生を「留学生扱い」しないことができる。残念ながら、日本の大学には多かれ少なかれ留学生を一種の弱者として扱う傾向が見られる。日本語はマスターできないほど難しい言語であり、ゆえにその言語で学ぶ留学生は当然のごとく日本人